

旅をつづけ単身日本に引揚げるまで、その労苦の生々しい実話は深い哀愁と驚くほどの強靱な意志で貫いてきた、「真心に国境はない」満州人と昭治少年はうるわしいほど親しみあって宝清から佳木斯、牡丹江、ハルビン、新京、奉天、コロ島、佐世保上陸へと、引揚げられたときは、昭和二十二年十月、十五歳である、よくぞ終戦以来二年三か月の間に正に故国を指して幾百里、ついに故郷にたどりついて感激の涙を流した。

昭治氏には比類ない人間性がある。少年にして既に教養と陶冶された精神が自ら身につく恩義に報いる道に生きた。

ソ連抑留一年間の生活を経て、父親は引揚げておられたので、日本再建は自ら耕すことだと決意し、父親の承諾を得て、北海道の幌延平原に牧畜開拓へと転じた。

昭和五十三年三月、昭治氏は三十二年ぶりに満州を訪問して残留している昔の開拓団家族と再会し、断腸の思いで引き裂かれた彼女たちの祖国への思慕の深さに涙を流し、五十四年三月には一家五人を北海道の幌

延の自宅に引受人として満州から迎え、生活の一切を責任もって世話している。

昭治氏のこの真実を見聞するとき、どなたも感謝しないものはいない。

(旭引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助

## 海外引揚者の語り継ぐ労苦

岩手県 佐藤 千代治

渡満から日ソ開戦まで

海外雄飛の野望に燃えて内地の官界を捨て、満州国三江省に渡ったのは昭和十五年八月であった。三江省は満州国の東北部に位し松花江、黒龍江、烏蘇江の三大河の流域で直接ソ連に接し省都佳木斯(人口約十三万)は全満屈指の軍都として師団司令部が置かれ、国境警備体制が敷かれていた。

他面佳木斯を中心とする第一次弥栄、第二次千振の

武装移民団以来十数次にわたる開拓団が入植多くの日本人が進出した満州国建国の歴史的な推進基地でもあった。

私が渡満と同時に就職したのは三江省公署であった。省公署は省都佳木斯市に置かれ、佳木斯市を中心に樺川、富錦など一市十県を統轄する大きな組織であった。最初に省長官房総務科を振出しに、ついで広報室に移り省政のスポークスマンとして報道関係者との折衝にあたった外各種の情報蒐集に努めたが、たまたま公務出張中発疹チフスにかかり九死に一生を得て帰国した。静養二か月にして帰任したら国境県への転勤命令が待っていた。即時辞表を提出。多くの慰留を断って野人にかえったが、通信報道関係者が競って自社勧誘されたので、世界の八大通信社の一つである同盟通信社（満州国通信社）佳木斯支局次長として再就職を果たすことができた。就職程なくして満州公安局の要請あって謀報委員としてアジトに出入し二重給料を支給される身となった。

家庭的には渡満四か月にして妻みつ江を迎え二年後

の十七年三月には長男邦彦をもうけ、二十年一月長女和子が誕生、国を賭けた戦争の最中にもったいない生活であり、生家にも毎月百円宛を送金して母親に孝養することができた。

日ソ遂に開戦となる。

終戦の昭和二十年は七月上旬から連日の降雨で陰鬱の日日であった。

八月九日午前零時三十分ドドンという万雷のごとき大音響と共に世の中の地震が一緒になって我が家に襲って来たような振動で目を覚ました。それは後で分かったことであるが、師団司令部と靈塔の中間湿地帯にソ連機が落とした爆弾第一号であった。

私どもは不可侵条約を締結しているソ連軍がまさか攻撃して来るとは夢想だにしないだったので、てっきり自宅前の無線塔に落雷があったことと判断し、再び深い眠りについたのである。

しかるに午前三時三十分ごろけたたましい電話で呼び起こされた。受話器をとると牡丹江支社の記者から「佐藤さん大変なことが起こりましたが、あなたの方

に変わりはないかね」との話であった。私は何の気もしないので「今朝零時三十分ごろ自宅前の無線塔に落雷があつて大変な音で目を覚ましたよ」と返事したら「何のん気なことをいう。今朝ソ連と戦争が始まったのだ。今関東軍から発表があつたので知らせる」というので早速筆をとつた。

昭和二十年八月九日午前三時三十分関東軍発表「ソ連軍は不法にも東部国境において地上攻撃せり」これと同時に「全滿主要都市を爆撃せり」と伝えた。これまで戦争に関する重大発表はすべて大本営発表であるが、日ソ開戦はどんな理由であるか知らないが関東軍発表であつた。

支局の職員を叩き起こして官庁特殊会社に電話で知らせるやら、問い合わせが殺到するやら大騒ぎとなつた。

かねて準備していた従軍服装に身を固め、早速三江省公署に赴いたら、途中敵機が飛来し旋回飛行を続けていた。

一応の取材を終えて帰宅し、支局職員と協議の結果

取材活動を継続するためには食糧の確保が必要であるので、特務機関に交渉して小麦粉を特配してもらうことになり、リヤカーをひかせながら特務機関を訪ねた。前庭の広場ではソ連のルーブル紙幣が山積みされて焼却の最中であつた。

ああもつたかと思つたが後で分かつたことであるが、この紙幣は日本軍の謀略用の偽紙幣であつた。とにかく特務機関との交渉が成功し、小麦粉をリヤカーに満載して意気揚々と帰つて来たのは午前十時ころであつた。

召集令状を受け市内警備につく

帰宅早早待つていたのは意外にも召集令状であつた。召集令状は御承知の通り赤紙と教えられてきたが、私の召集令状は白紙の模擬召集令状の下半分を赤インクで染めた奇形の召集令状であつた。それは全滿主要十六都市に対し満十八歳から四十五歳までの男子に都市防衛召集の名目で召集されたのであつた。

支局の職員に後事を託し家内に対しては「一切私に頼らず子供を守つて会社の指示に従つて行動せよ。余

計な欲を捨てて、持てるだけの食糧を確保し多少の常備菜と冬を考え毛糸を持って行くように」と諭して現地八五三部隊に入隊したのであった。

八五三部隊の大隊長は同郷の先輩である阿部肇大尉で意気込んでおられた。

四月から六月まで二か月現地教育召集を受けた。同年兵や、県人の姿も見られたが開拓団の人たちが避難の途中で親子、兄弟が召集編入された者も相当多かった。

やがて新しい部隊が編成され大隊長は佳木斯医科大学学監西村大佐がなり、軍装に身を固めた私たちは市内警備の任についた。

警備地区に赴く私たちの眼に映じたものは召集された夫のあとを追うごとく右往左往する難民の群れ、腹立たしい満軍の銃声、雲霞のごとく物資倉庫に襲来する泥棒の隊列、焦土戦術に狂奔する日本軍の火薬庫、燃料庫の爆破などなど、一瞬にして地獄絵と化し王道楽土は深い悲しみに落ち込んで行った。

今にして思えば日ソ開戦は日本の運命を決定づける

悪夢の一日であった。

我が社我が家炎上

市内警備も瞬く間に五日を経過した。市街地周辺の兵舎、飛行場、弾薬庫の軍事施設の撤退作業を企図する軍によって火が放たれ、暗雲の中にドドンという爆音と天に沖する炎との間隙をぬって、敵機は何等の抵抗もなく乱舞するごとく銃弾の雨を降らせた。

開拓団や国境地域の難民は続々と佳木斯駅付近に集結して来たが、夫は開戦と同時に召集され妻子はソ連や土匪に追われ着のみのままの馬車の逃避行、二日、三日を費して無我夢中でたどりつき私たち日本兵を見つけてあんだのあまりばったりと倒れる者も数知れなかった。

特に国境県に転動を命ぜられ上司に抵抗して同盟通信社に走った私に代って、鶴立県公署から赴任した国武君（福岡県出身）の奥さんが大きな腹をして小さな子供を抱えて避難して来た姿には慰める言葉すら窮するものがあつた。

人伝によれば国武君は避難途中、ソ軍の狙撃によつ

て一命を失った模様である。

十四日午後には私たちも難民と共に佳木斯を撤退することを申し渡されたので許可を得て会社と自宅を訪れたところ、支局はもちろん社宅は泥棒によってほとんど持ち去られわずか支局備え付けの写真機と自宅には、伴邦彦の帽子のみが残され、結婚記念に送られた盧元善（三江省長から終戦当時の文教部大臣）の掛軸のみは破られた窓風に揺られていた。

そこで廃家同然の建物をそのままにして立ち去れば未練がましく思うので、事務所の一角に隠しておいた石油を散布し、火を放って炎災と燃える我が社、我が家に別れを告げて再び雑踏の駅に向かった。

さらば佳木斯よ

駅に戻ると難民の数は倍増されていた。夕闇迫るころ無蓋貨車と旅客列車が約十輛準備されいよいよ乗車命令が出て乗車が開始された。前の無蓋貨車は私たち兵で後部の旅客車には難民がそれぞれ乗車をした。

私の乗った車輛は無蓋車であった。十時ころまでかかって列車の乗り込みと食糧の積み込みを終え、出発

直前に君が代斉唱、祖国と皇居そして忠霊塔を選擇し、更に「さらば佳木斯よまた来るまでは」と「さらばラバウルよ」の歌詞をもじった歌をうたい、別離の盃を酌み交してまさに列車が発発する直前、私は二等兵の分際を忘れて惜別の演説を試みた。

「お互いに祖国を離れて管営として策いた名譽と地位、財産、いわば第二の故郷佳木斯を捨てることは断腸の思いである」ことを切切と涙ながらに訴えた。将校も兵も皆泣いている。

私も生涯にとって忘れ得ぬ演説の一つと今もって思っている。私の演説が終わると難民の中から涙を流し私の手を固く握ってくれる男があった。誰かとその顔を覗き込んだら佳木斯市副市長渡辺氏であった。彼は今ごろどこで何をしているやら列車は汽笛一声佳木斯を後に第一の目的地北安省綏化に向けて発進したのである。

列車脱線させらる

佳木斯を出発して懐かしの松花江の鉄橋を渡り綏佳線と鶴岡線の分岐点である対岸の蓮江口駅に到着した

のは真夜中の十二時過ぎであった。疲れがたつたのか子供の泣き寝入りのように眠りに落ちていった。

しばらくまどろむ間もない午前五時五分、福隆駅と湯原駅にさしかかるや「ガタン」という音をたてて急停車した。

それと同時に右側の湿地帯から銃声が鳴り「ビュービュー」と銃弾が流れて行く。周章狼狽した我が中隊長松田准尉が「撃て撃て」と絶叫し自分が木陰に隠れようとする。

その時年のころ三十歳の国防服をまとった女装の女が避難列車から飛び降り鞭のような指揮棒を持って十六歳ぐらいから二十歳前後の国防服姿の若者百人の集団に対し「何某と何某がこの方面を警備する」「何某と何某が難民の保護にあたる」とさながら五指を動かすようにきびきびと指示を与えている。

私はこの怪物が一体何者だろうか。我がへつぱり腰の中隊長に比べて天地雲泥の差があるので調べて見たら樺川県の八蘭河少年義勇開拓団の保母で団長、営農指導員がほとんど応召し同開拓団を女手一つで運営し

ていた宮城県出身の青木某と判明した。

列車脱線の原因はレールの継ぎ目に取付けられたゲージを外して脱線させた土匪の仕業であり数分の交戦後赤旗を掲げて退却して行った。

鉄道の復旧作業は幸いにも満鉄の技術職員であった笠原小尉がおったので、脱線機関車を線路外に取除き湯原駅から別の機関車を呼び寄せて八時を過ぎたころようやく鉄道作業も復旧してやれやれと作業班に感謝しながら再び車上の人となった。

#### 日本敗戦確定す

列車は走っては止まり止まっては走る鈍行運転である。それは今朝未明の脱線の教訓を踏まえた安全運転である。

翌十六日小興安嶺の山麓、涼台を過ぎて綏佳線の要衝、南又に着いたのは正午を過ぎていた。この駅でも難民が乗り込み雑踏を極めたが、その間三十歳の開拓民らしい男性が乗り込んで来た。その人がラジオを傍受しておたらしく「昨日の正午天皇陛下が日本国の無条件降伏を涙ながらに宣言された」と話した途端蜂

の巢をつついたように車中は一大騒然となり「敵の謀略だ」「神国日本は敗ける訳はない、でたらめ言う奴をぶっ殺せ」と殺気だつて騒然となつたが幸いにも暴行まで発展しなかつたことはせめてもの慰めであつた。一夜明けて十七日早朝列車は第一の目的地北安省綏化駅にすべり込んだ。

到着早私は天皇陛下の降伏放送の真偽を確認すべく、報道関係出身の特殊身分を活用して一足先に到着した難氏の有力者を捜して情報蒐集を命ぜられた。

樺川県副県長大貫氏、三江省公署小島参事官など数氏にあつたが大部分の方はほぼ間違いないとの結論を得たのでその旨を中隊本部に報告したら、興奮した隊員も沈痛な気持ちに一変しやむなく宿舍の割当を待つことになつた。

やがて宿舍は、兵は綏化飛行場の空屋と化した官舎に、難民は格納庫とそれぞれ決まつた。

ソ軍進駐す。

数日後、私が大隊本部付を命ぜられ教育召集時代の中隊長であつた片山副官の秘書役を仰せ付けられ、大

隊の行動日誌や命令の起案などが任務であつた。それからほどなくして二十三日を迎えたがソ連の軍使が飛行機で到着するという情報が入り隊内の空気がビリビリする中にやがてソ連機から数人のソ連将校が降りて来た。

ソ連軍が進駐して来たら果たして日本人がどうなるかと不安のうちに西村大佐以下幹部が彼らを出迎えた。両者の会談は飛行隊本部で行なわれ、日本国の無条件降伏を伝え追つて進駐して来るソ連軍の到着と同時に武装解除する旨申し渡された。

翌日ソ連兵が進駐して武装解除が行われ銃はもちろぬ日本刀の一切が没収され、おまけに「お前たちが負けたのだから宿舍毎に白旗を掲げろ」と指示された。

敗戦など夢想だにしなかつた私たちには白旗など持ち合わせる余裕も話もなかつた。この屈辱にいかにか答えるかと相談の結果各宿舍ごとに最も汚い禪をつるし鬱憤を晴らすことに決めて晩夏の空になびかせたのである。

満州からソ連に移送さる。

緩化駐屯から一か月を過ぎたある日私たちに移動命令がでた。難民の将来を案じながら無蓋車に乗り込み出発することになった。一般兵には行く先を知らされず不安の中に北進を続けること数日、到着したのは黒河であった。

その間大隊長の西村大佐がよそに異動され、後任は片山副官が昇格した。

黒河は黒龍江に沿った要衝の港街であり、黒河省の省都でもある。いつ渡河命令が降りるかと案じておったところで片山大隊六百人に対し乗船命令が下ったのである。黒河の港に横付けされた船に食糧そのほかの必需物資を積み込み、続いて兵が乗り込み、十月一日未明、初霜のソ連領グラゴエチンスクに第一歩を印したのである。

兵は命に従って黙々と荷役作業に就労したが、ソ連側の情報として「私たち日本兵はブラゴエから鉄路ウラジオストックに輸送し、速やかに日本に帰す」という朗報が流された。兵はこんな虚報にも裏をもつかむ心理から一様に湧いたものである。

私たちの乗り込んだ列車は汽笛一声鉄路を走り出した。列車はお粗末な貨物列車で板を並べた急造の三段ベット、毛布一枚を敷いて背嚢を枕に軍服着用のまま外套を被るといいういでたちで、これがソ連を引揚げるまで一つとして変わらないソ連生活のスタイルである。

密閉された車内は石油ストーブの暖房、そして大小便に用いる便器も同居し、即給食という正に地獄列車である。二日経っても三日経っても目指すウラジオストックには着かない。思案したり、あれこれ騒いだりしているうちに磁石を持合せた兵は列車は東進ではなく逆に西進であることを伝えたので兵の動揺はただごとではない。やがて列車は満鉄の接続地点であるチタに到着して騙されたことを初めて知りじだんだを踏んで悔しがったものである。

腹痛を経ながらクラスノヤルスクに到着す。

わずかの停車時間を経てチタを出発した。私たちの捕虜輸送はシベリア鉄道を西へ西へと進んだが、私は途中でわか腹痛を起しはじめた。既往症の経験から盲腸炎でないかと案ぜられたが幸いにも星子軍医がお



られたので早速診察をお願いしたところ私の想像した通り盲腸炎と診断された。

しかし輸送列車の中でもあり手術はもちろん不可能なことはわかっているが不幸にも化膿したら一命にかかわる重大な問題であると独り寂しい気持ちにもなった。

戦友が交替で水タオルを交換しながら患部を冷してくれたので翌朝は腹痛もおさまり、やれやれ助かったとあんだの旨をなでおろすと共に軍医や戦友に感謝の念を捧げたものである。

列車はついにバイカル湖畔に到着した。バイカル湖はむしろ湖というより内海という感じがする。もちろん対岸の陸地などは見渡すことが出来ないし、時折広漠たる水原を走る船舶もあやしげな小窓から散見される。湖畔を走ること二昼夜を要したが、その間何十、何百というトンネルを潜り抜けたはずであるが、その数はどれほどであったか記憶しておる者はだれ一人としてない。

バイカル湖畔を過ぎて二昼夜、かの有名なイルク

ツクに到着、それから更に二昼夜の旅を続けて私たちの始めての収容所の所在地であるクラスノヤルスクに到着したのである。

#### 食糧難と用便の苦痛

クラスノヤルスクはソ連屈指の都市で人口約五十万と称されシベリアの三大河エニセイ河に沿って形成された近代都市であるらしく、日本人捕虜も相当多く収容されている模様で私たちは第八収容所に収容する旨申し渡された。

翌日から便所の設営を皮切りに製材工場そして家屋建設に就労し「ダワイダワイ」「ピストラピストラ」と「弾丸のように休むことなく働け」と酷使された。

ソ連抑留者の最大の課題は何といっても早期帰国と食糧事情の緩和である。当初食糧については主食は麦を粉にして植物油か牛頭を煮出し、それに岩塩とキャベツの漬物を混入してオジャにしたものをざっと飯盒一杯宛支給された。食糧も時折変わり、粉の代りに満州から略奪した高粱を配給されることもあったが精製しない原穀のオジャには全く困ったもので喉の通りが

悪くたちまち便秘が起こり、四苦八苦のうめき声の合唱であった。

また通常の用便とてそれに劣らぬ苦痛であった。縦三メートル横十メートル深さ二メートルぐらいの穴を掘り径十センチぐらいの三本宛合わせて足場とする簡易便所で肝心の周囲を囲う施設はまるきりなく三人、四人の縦列横隊で大きな尻をまくって力んでいる姿の毎日であった。特に下痢の人が用便しているとき、強風が吹いたら糞尿の諸味をもろに受ける。後列の者はたまったものではなかった。ましてや零下四十度五十度の極寒の用便は苦痛の最たるものであった。用便を終えてズボンを引揚げ暖まるまでは相当の時間を要したからである。

続食糧難と笠原中尉殺さる。

飢えに苦しむ捕虜生活には幾多の思い出があるが当初に書いた記述の外に二、三の事実を申し述べてみよう。

ある日作業を終えて收容所に帰る途中凍てついた路上に二、三十個馬鈴薯らしいものが散乱していた。そ

れを見付けた兵は隊伍を崩して我先にと競って拾い勇躍して持ち帰りペーチカの鉄板上に乗せた。ジュウジュウと変な音をたて焼けると同時に臭気を発して分解し初めた。瞬時にして兵の顔が歪んでいった。それは馬鈴薯ではなく馬糞そのものであったからである。

ある日ロシア夫人の悲鳴がきこえて来るので何事かと馳せ参じたら、ポーチカ樽に中猫程の鼠がいるので撲殺を依頼され早速一撃を加え撲殺して持ち帰ったら今度は猫が現われたと情報が入ったので直ちにその猫を撲殺してどこに処分するかを協議した結果暫く振りに手に入った動物だもの、一緒にたいて猫鼠パーティーを開こうと一決した。早速飯盒を準備し猫と鼠とアイヌネギそれに岩塩を入れて久し振りに狂妄を開いた。鼠が小鳥の味がしたが、猫の肉は柔らかいけれども汁に丸い油が浮いて猫の目のように映るので思う存分食べられなかった。

第二回の冬を迎えても食糧はもちろん労働はいっこうに緩まる気配がない。将校、下士官には依然として階級制度が現存し、犠牲者がないがこれに反し兵は今

日は一人、明日は二人と連日のごとく相次いで死んで行く。

従って上官と兵との溝が日一日と深まり一触即発の状態である。私はこの事態を憂慮し大隊長の秘書役を努めた関係から大隊長に現況を直訴して帰った。

その翌日笠原中尉が瀬戸二等兵を、パン倉庫を破りパンを盗んだとの理由で大衆の面前で殴打したのであった。瀬戸二等兵はその仕返しに作業現場で笠原中尉につるはしで一撃を加え即死させたのである。笠原中尉は湯原島の列車脱線の際抜群の功績のあった方で、つい一週間前の短歌会で

何時の日か渡りて帰る日もあらむ

エニセイ河のくろがねの橋

と詠んだのが辞世の句となつてしまった。

再度の入院体験と妻子無事帰国の朗報受く。

建設現場に就労してから六か月、前の晩から腹痛を起こしておったけれども休ませてもらう見込がないので押して作業に赴いた。しかし一向に治る気配がない、従来の経験からして盲腸炎に間違いないと信じ、作業

後戦友に支えられて収容所に帰り症状を申告したら星子軍医は盲腸炎ならもっと苦しむ訳だと取合ってもらえない。しかし渡辺軍医は佐藤君は普通の兵と違う、間違いないと思うからソ連軍の軍医を呼び戻そうということになり、百メートル以上も追いかけてもらい腹手術の結果腹膜炎を起し破裂直前で幸運にも一命をとりとめることが出来た。盲腸炎を患ってから半年くらい経って今度は痔が痛み出し再度入院手術が成功裡に終わることが出来たが一週間後の用便には人生最大の苦痛を体験した。

力むと肛門の傷跡が裂ける。力まねば用がたせないという苦心談の一コマである。

またある日二か月前にソ連側から支給されて送った往復葉書の返信が妻から届いた。

「あなたと満州で別れて以来一年一か月、二人の子供を抱えて筆舌に尽くしえぬ苦難の途をたどり、親子共々に元気で祖国の地を踏みました。

母をはじめ家族、近親に大変喜ばれました。今度はあなたの元気で帰る日を神かけて祈っております」と

の朗報に思わず万歳を叫んでしまった。

レニンスク収容所に転送さる

クラスノヤルスク第八収容所生活二年の秋を迎え体の虚弱者から漸次帰国するという定評が定着しはじめたころ足立中尉以下六十人に對しにわかに移動命令が出た。私もその中に入っていたので今度は帰国出来るものと心ひそかに喜び幾多の思い出多い収容所に別れを告げて停車場に向かった。

かつて二年前第一歩を印したクラスノヤルスクの駅に着いたら私たちを乗せる貨車は既に準備されて待っていた。

しかし肝心の牽引する機関車は帰国列車なら東に取付けられる筈であるが西に取り付けてあるので不安を抱きながら乗車したら予感的中して西に向かって走り出した。

鈍行二昼夜を要してやっとたどりついた所はレニンスクである。到着した駅付近の沿線はピカピカと光る黒ダイヤそのもの。優良石炭が大きな堤防状に何百メートルも野積みされている。

炭鉱であることは一目瞭然である。後で判明したことはレニンスクは「ドンバス」「ベキヨロ」と並んでクズバス炭田の中心地でキロワ、カムサモレーツの二炭鉱から成立ち人口約十数万を数える中都市である。収容所は八収容所に分散されているクラスノヤルスクと異なり、三千人の捕虜を一か所に収める大収容所で大部屋に分宿である。

到着後便所に行くと「藤沢天皇を殺せ」「藤沢共産党を排除せよ」などの落書が至る所になされているので、思想闘争の激しい収容所であることが察せられた。

肉体労働より酷な思想攻勢

翌日の作業は採炭事業ではなく雑用であったが作業を終えると前から収容所におった代表と私たち新入所代表の懇談会を開きたいとの申し入れがあったので協議の結果、石田君（後の尾崎財団常任理事）と登坂君（東本願寺佳木斯住職）と私が代表として出席することになった。相手は藤沢軍曹と共に共産かぶれが十数人が出席して歓迎の辞から始まり「収容所生活の運営は社会主義ソ連の思想を尊奉して帝国主義と戦いなが

ら我らの祖国ソ連のために誠心誠意働いてもらいたい」との話であった。私と石田君はクラスノヤルスクで事件が起こり、人格徳望のある者を選び合議性による運営が好ましかったと主張し登坂君は宗教的立場から人道論を説くが相手方は反省の気配もなく、それ以来私たちは反動の烙印を押され、ことあるごとに大衆の面前に呼び出されつるしあげの連続であった。

つるしあげとは大衆面前に「同志何某出ろ」と呼び出され、本人は先ず本籍、住所、氏名、生年月日、経歴の概要、資産の概要を申告することが義務づけられ、それから検察官的役割を果たす共産分子からつるしあげを開いた問題について尋問される。その件について満足なる答弁を得るまで寄つてたかつて攻めたてるので気の弱い者はその通りと容認させられた後、自己批判を求められる仕組みになっている。

最高学府を終えてそれぞれの管理職とか資産の多い者は「反動分子」とか「財閥の片割れ」と罵られ最後に「日本に天皇があればよいか」「共産主義をどう思うか」と詰め寄られるという仕組みになっている。

サボタージュ、生産妨害した場合共産分子によって直ちにソ連側に通報され二、三年から二十年まで懲役に追込まれた例もあるのでちょっとした隙もない日々である。従つてつるしあげをいかにして切り抜けるかが大きな課題であり、肉体労働よりも酷な思想攻勢が帰国まで続いた。

#### 災難続きの炭鉱作業

最初に与えられた食糧運搬作業も二か月で反動分子の烙印を押された私は懲罰を兼ねてか坑内作業に回された。

坑内作業は三交替制で、回されたところはカムサモレーツ炭鉱で、収容所から二キロそこそこで徒歩で通い坑内事務所で坑内帽、電灯、バッテリー、つるし、シャベルなど七ツ道具を渡され坑内に向かうのである。坑内の立坑はエレベーターを用いず梯子段を降りて行くのであるがその梯子段たるや驚くなかれ七百八十六段で地下坑道に達するのであるが、梯子段の所々に踊り場があるけれども足元がガタガタと震えるのである。

最初に私が与えられた仕事はトロ押しであるが地下坑道を二キロぐらい歩いて採炭現場に到着するのである。何せ要領がわからないので早速二ントロを脱線させてしまったので一生懸命杭を枕にして復旧作業に頑張っていたところ突然背後から頭部に一撃を食らって脳震盪を起こしてフラフラとなった。その一撃は丸太棒か何かと思ったら敵も砕くソ連兵の鉄拳であった。悔しさにそこにあった丸太棒で叩き返してやりたい感情にかられたが、これをしたら祖国帰還が望めないので忍の一字に治める外はなかった。

炭鉱就労一日の苦い体験からトロ押しでもなく、石炭の流送作業に回してもらった。鉄板製の樋に石炭を投げ込み斜坑に流送する単純なる仕事であるが、水滴が落ちて来ると炭塵が固まって流れないので樋に尻をついて押しして行き出口寸前に飛び出れば理想的であるが、下手をすると炭と一緒にトロの積込場に押し込まれるという危険がある。慣れない作業なので過って飛び降りそこねて押し流され命からがら逃げ出すと拳大の炭の固まりが飛んで来て鼻下にあたり二針縫うとい

う大怪我をして、私は採炭作業はいよいよついでないということも思ったが捕虜の悲しさどうすることも出来なかった。

#### 待望の帰国命令を受く

在ソ生活三年の春から三、四か月の割合で虚弱者を主体とする帰国者らしき少数部隊が逐次収容所から去って行った。残された者の寂しさは格別で気の弱い者は健康に恵まれた自分を喜ぶべきはずなのに、むしろ逆に虚弱者をうらやむ錯覚を起こす者もあった。

来る日も来る日も暗い炭鉱で働く身の哀れさをひとしお感ずる晩秋のある日、晴天の霹靂のごとく入ソ以来待ちに待った帰国命令が出た。

天にも昇る心地で帰国準備にかかったといっても特別の財産とはなく、本当に着のみ着のまま特に配慮された綿布の刺子よりの外套くらいのもので、三年有余枕の代りに用いた背囊と敷布団代りに用いた毛布を抱え総勢六百人の大部隊はレニンスク駅に向かった。

万感をこめて駅に到着すると既に貨車は準備されて一年前に到着した時と反対に機関車は東に向かつてい

た。やがて万歳を唱えるごとく貨車は汽笛一声発車した。

二昼夜にして思い出多いエニセイ河の鉄橋を渡り懐かしのクラスノヤルスクを通過バイカル湖畔を経て、チタ、ブラゴエスチンスクを東進、レニンスクを出発してから十五昼夜の長旅を続けて鉄路の終着駅ナホトカに到着したのである。

ナホトカに滞留すること四日間厳しい共産教育を受けたり、日本に返すなと脅かされたりして、初冬の風吹く十二月二日午後待望の復員船興安丸に乗ることが出来た。

#### 夢の祖国帰還と人生の再出発

ドラを合図に船は祖国に向けて進航。やがて船室で装具をときこれで間違いなく祖国の地を踏む資格を手にしたものとあんどしたものである。

船長からの祝辞があり続いて夕食である。夕食は小鯛の塩焼き、米飯に味噌汁、野菜の漬物である。箸をとるのもどかしく万感胸に迫るものがあった。

焦燥の中に船中生活三日目の朝遥か向うに祖国の山

野がかすかに見え始めた。だんだん時間が経つにつれ天衣をはぎとるように画然と錦をまとうた舞鶴の美観が目前に開け本土に第一歩を印すことが出来た。

思えば三年有余の抑留生活から解放されて夢に描いた祖国。ここには共産思想の圧力もなくだれの暴力にも屈することのない、やっとの思いでたどりついた故郷の地でもある。ドッドと一歩、二歩、力一杯黒い祖国の土を踏んだ。感慨無量そのものであった。「万歳、万歳」と心の中で叫びながら与えられた宿舎に足を運んだ。初日は共産党藤沢天皇と、日の丸組代表として私がCICで対決を命ぜられ二日目からは健康診断と思想問題の調査が進められた。

しかし復員局の新聞社ニュースとして昭和二十二年、二十三年のカザリン、アイオン台風による郷里の被害を知った。

復員局において七ツボタンの予科練が着用した紺の軍服一着と更に現金一千元也を支給された。

諸手続を終えて解放され、ボロ列車に乗せられて郷里に向かった。

川崎の義兄が上野駅に迎えに来られたので一泊し十二月十日午後四時を回ったころ花泉駅に着いたのである。

出迎えの近親の方々や多くの人々に謝辞を述べ帰国の挨拶をした。その出迎えの中に恥ずかしそうな顔をした小学校一年生の長男邦彦から「お父さん元気でお帰りなさい」と言葉をかけられたときはうれしきで胸が一杯であった。

やっと我が家にたどりついたら母も妻も喜んで迎えてくれたが、生まれて八か月そこそこで別れた娘和子は容易に近寄らなかつた。

私の第三の航路は、たくましく二児はそれぞれ大学を終え長男は不動産鑑定士、娘はハム工房長として社会に活躍、私も町議会議長で、その他公職をつとめ後進に道を譲り愛妻と共に悠悠自適の生活を送っている。

#### 【執筆者の横顔】

佐藤氏は、岩手県花泉町の住人、大正四年生まれ、実業専修学校を卒業の後、六原道場で三年間学ばれ、

大陸志向の彼は、昭和十五年八月、満州国官吏に招へいされ、三江省省長官房総務部弘報室に奉職した。その後、満州国通信社、つまり同盟通社に転じ、佳木斯支局次長、同時に公安局要員を兼務して八面六臂の働きをしていた。そのころ、遠い満州行きをなげいていた母に毎月百円送金して喜ばせていた。

突如、昭和十九年、召集をうけ現地の第八五三部隊に入営、まごまごしているうちにソ連の不法越境、国境の町に住む日本人の社会はすべてソ連軍の悪事で地獄化した。

八月二十三日、西村大佐らは白旗を掲げてソ連軍に降伏した。佐藤氏は佳木斯市に住む家族を心配するが、どうにもならない、断腸の思いでソ連軍に逮捕されてシベリアに連行され、ブラゴエ駅からウラジオストクに送り日本へ帰すと言いながら、逆にチタ、更にイルクーツク、更に奥のクラスノヤルスク収容所にぶちこまれ寒さと飢えで毎日毎日多くの死人を出したのである。

しかも思想攻勢は日本人同志が悶々として戦ってい



るのに対し、佐藤氏は、ソ連軍におべっかして日本人を殺して、われ一人だけ生きのびようとするものの工作を粉碎するために生命がけて努力したのはあっぱれである。

彼は、腹膜炎の手術、更に痔病の手術で瀕死の患者となつて、若干早くといつても三か年間の抑留を解かれて興安丸で舞鶴港に上陸、復員局から軍服一着と一千円の支給をうけて故郷の花泉町についた。昭和二十三年十二月、母の健在、妻子は生きて引揚げておられたのに感激の涙を流した。

引揚げて既に四十五年は夢のように過ぎた。

その間二人の子はそれぞれ大学を卒え、不動産鑑定士、娘はハム会社の工房長、佐藤氏は無私欲で報恩感謝の念厚く長期にわたり町議会議員に当選し、現在は八十歳で若者を凌ぐ健康で議長に就任し一身に衆望を担い自治発展に努力している。

(出引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助)

## ラーゲリからの帰還

岩手県 竹田 正直

平成五年の夏、私は四十五年ぶりにシベリアの土を踏んだ。

岩手県遺族連合会(長野マサ会長)主催のシベリア慰霊巡拝団(菊池正団長・総勢五十二人)の一員としてである。

慰霊巡拝団は八月六日、アエロフロートのチャーター便で青森空港を離陸、かつて船で往復した日本海をあつという間に飛び越え、極東の都市ハバロフスクにたどり着いた。

あっけないほど、短い空の旅だった。

空港に着陸する前、眼下には懐かしいアムール河が竜のようにうねっているのが見えた。あの河を泣きながら、囚人のように歩いたことがまざまざと蘇ってきた。